付篇3

山口県宇部市月崎遺跡出土資料について

川島　尚宗

1．遺跡の位置と環境

月崎遺跡は宇部市大字東岐波字月崎に所在し、瀬戸内海に面する標高約4～8mの砂堆・砂丘上に立地する。遺跡の範囲は東西約100m、南北約80mとされる。現在、遺跡の西側に砂浜が広がっているが、縄文海進期には湾が大きく入り込んだ地形をなしていたと考えられている（潮見1968a、中越1985・2000）。月崎遺跡は縄文時代前期から後期にかけて占地されたと考えられるので、各時期によって周辺の海岸線が変化しており、遺跡形成初期には岬の先端部付近に位置していたこととなる。背後に標高146mの日ノ山があり丘陵状の地形が広がることから、狩猟・採集もおこなわれたと考えられるものの、出土遺物・立地からみると海産資源を積極的に利用する生業形態をとっていたものと推測される。

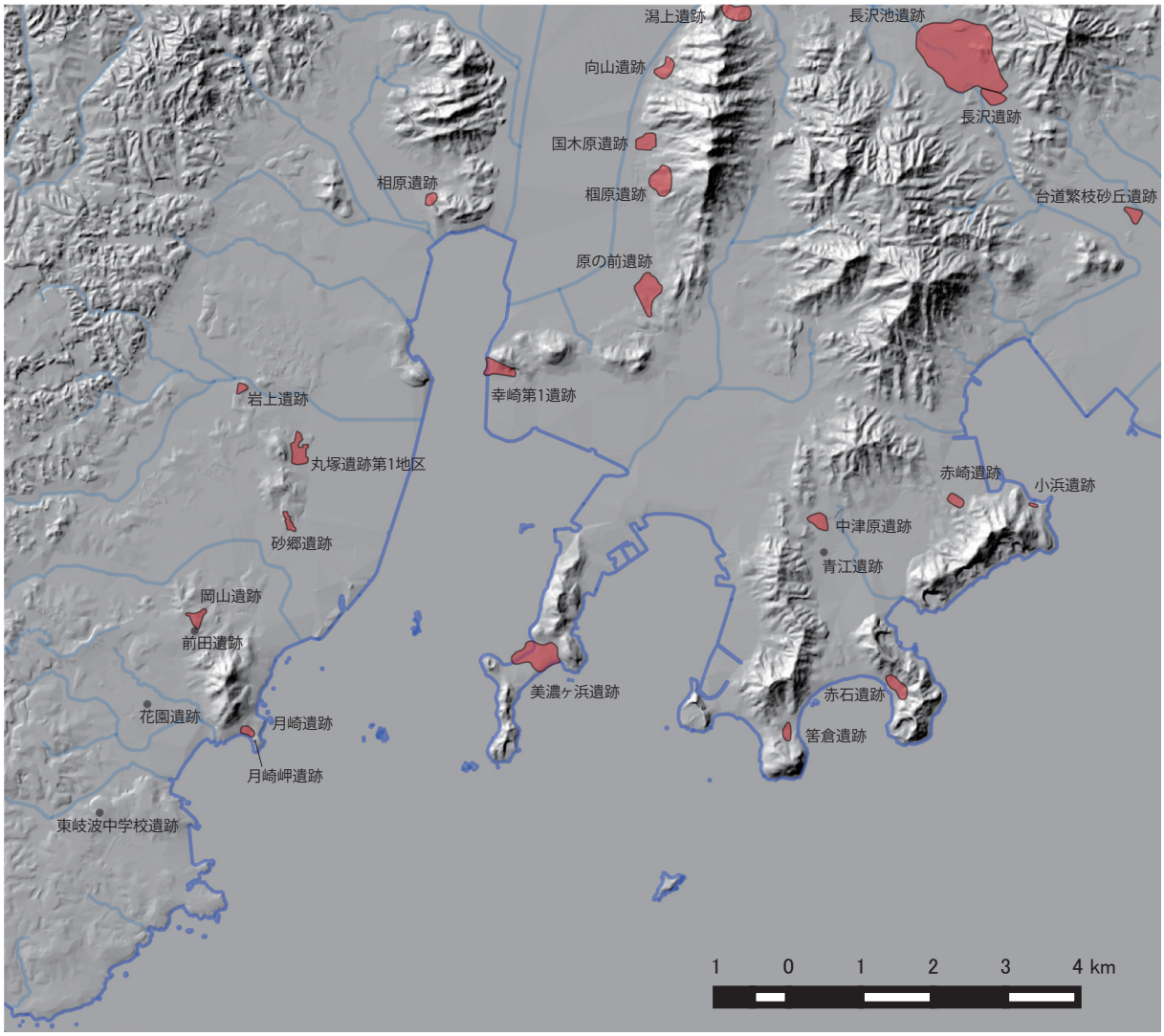

図 70　月崎遺跡周辺縄文時代遺跡分布図
（国土地理院発行基盤地図情報数値標高モデル、国土交通省国土政策局国土数値情報（海岸線・河川データ）、山口県文化財地図情報システムより作成）

月崎遺跡の周辺では、少ないながらも月崎遺跡のように海岸部に立地する遺跡がいくつか分布している（図70）。美濃ヶ浜遺跡では、縄文時代前期から晩期にかけての遺物が出土している。遺跡は砂堆上に立地し、2つに分層された遺物包含層のうち、下層は前期・中期の遺物を含み、上層からは後期・晩期の遺物が出土している（小野1961a、幸泉2005、澤下2000）。出土土器の傾向は、月崎遺跡と共通する部分が多いようである。美濃ヶ浜遺跡における土器以外の遺物では、石斧・石鏃・石錐などが少量出土している。当時島であった状況からは、美濃ヶ浜遺跡における生業は漁撈が主体であったと考えられよう。

美濃ヶ浜遺跡の東側には、筈倉遺跡・赤崎遺跡・赤石遺跡・小浜遺跡が海岸付近に立地しており、周辺地域に臨海性遺跡が展開していたことがわかる。月崎遺跡の立地する岬の先端部には、月崎岬遺跡が所在し、縄文時代後期の土器とともに石錘が発見されており（潮見1968b）、集落とはいえないものの小規模な臨海性遺跡はほかにも点在している可能性がある。

月崎遺跡周辺では、海岸から離れた地点でも縄文時代の遺跡が確認されている。日ノ山北麓には縄文時代中期末～後期前葉とみられる砂郷遺跡（冨士埜1999）が立地し、さらに岡山遺跡（冨士埜1996）、花園遺跡（三浦1968）、前田遺跡（小野1968、河村2000）など縄文時代の遺跡が分布している。これらの遺跡の中には、遺跡形成時には海岸付近に立地していたものも含まれると考えられ、さらに山口湾奥部にも丘陵裾部に展開する遺跡が認められる。少なくとも、岡山遺跡・東岐波中学校遺跡などは、海産資源への依存度の低い生業形態をとっていたと考えられよう。月崎遺跡周辺の縄文時代遺跡すべてが定住集落とは考えにくく、季節的移動の結果として残された可能性を考慮しなければならない。遺物量が豊富であり、複数の遺構が確認されている月崎遺跡は、周辺地域の中で比較的拠点的な居住地として機能していたと考えられる。

2．月崎遺跡の調査

第1・2次調査

山口大学埋蔵資料館には月崎遺跡出土資料が収蔵されており[註1]、ラベルに記載されたトレンチ名から、第1・2次調査時に出土したものと考えられる。第1次調査は、1961年4月3日から7日まで、第2次調査は1962年7月28日から8月3日までそれぞれおこなわれた（潮見1968a）。両調査は、宇部市市政40周年記念事業としておこなわれたもので、山口大学・広島大学を中心とするメンバーが発掘調査にあたった。これまでに調査の概要が数度報告されているが、詳細は明らかではない。ここでは、既報告資料をもとに情報を整理しておきたい[註2]。A・Bトレンチは第1次調査、C・Dトレンチは第2次調査の際に設定された。

遺跡の基本的な層序は、第1層：耕作土、第2層：茶褐色風成砂層、第3層：黄白色風成砂層、第4層礫混じり赤褐色粘土層、第5層赤褐色粘土の洪積層となっている（中越2000:140頁）。第2層は遺物包含層上層とされ、縄文時代後期の遺物を主体としつつ、上半部では縄文時代晩期の遺物も出土している。第3層は包含層下層とされ、主体となる前期の遺物のほかに中期の遺物を含んでいる。第1次・第2次調査においては、遺跡の中央部において、第2層の下端部に縄文時代後期の土器が集中して出土する傾向がみられた。第3層のうち、上端部の20～30cmからは条痕が施された土器が、A1・A2・A6・A7、D1～3トレンチにおいて集中的に出土している。

第1次・第2次調査では明確な遺構は検出されなかったものの、いくつか居住の可能性を示す痕跡が確認された。焼石・木炭・縄文後期土器の集中がいくつかみられ、焼石の単独出土も多かったとされる。

図 71　月崎遺跡トレンチ配置図（中越 2000 図 1、潮見 1968a 第 20 図より作成）

焼石は、A1区の中央から西半にかけて、A4区の中央部で数個がまとまった状態で出土した。ただ、これらは二次堆積の結果とみられている。A4区の西半で、厚さ5cmの層として検出されたが、遺構とは認定されていない。A1・A2区の間（A1’）において、焼石4個・木炭・土器・石斧・石錘がまとまって出土しており、生活面の状況を示すとされた。D6トレンチにおいて焼石・土器のほか焼土（木炭）が集中して確認されている（図71）。C5・6区では長軸1.8m×0.4m、深さ15～30cmの落ち込みが検出されているが、性格は明らかにされていない。

第2層に相当する遺物包含層上層下端のレベルをみると、A8・A9区に分布の中心があり、第3層の最高点付近が活動の中心地点であったと考えられている（潮見1968a）。基盤層となる赤褐色粘土層は、山側から海側へ全体的に傾斜していることを考えると、遺物包含層上層下端に遺物が多数みられることから考えると、遺物包含層上層の堆積開始時には遺物包含層下層の最高点付近を中心に居住活動が展開されたと考えられる。

当遺跡での出土土器は、包含層上層・下層の出土層位によって、2つに大別されている。さらに、土

器の器形・文様・調整などから細別がおこなわれ、地域的特色をもつ月崎下層Ⅱ類など、西部瀬戸内地域の土器編年上重要な遺跡となっている。

下層Ⅰ類は二枚貝の貝殻条痕を多用する土器で、九州の轟B式の影響を受けている。下層Ⅱ類は押引刺突文が文様の中心をなし、羽島下層式の影響を受けているとされる。下層Ⅲ類は綾杉状・平行沈線文を主体とする土器であり、この土器群も九州の影響が強いと考えられる。下層Ⅳ類は瀬戸内海縄文中期船元式の影響を受けた土器である。

上層Ⅰa・b類は、縄文後期の中津式・福田KⅡ式・鐘崎式に併行する土器である。上層Ⅰa類は、磨消縄文を主体とする中津式・福田KⅡ式併行の土器で、曲線文の間に縄文を施文するもの、縄文が施された三本沈線で文様を描くものがある。上層Ⅰb類は中津式・鐘崎式に相当し、沈線文を主体とする土器である。上層1c式は口縁部に貝殻・竹管状工具を用いて施文する土器であり、Ⅰd類は口唇部に刻目を施すもの、1e類は無文・巻貝条痕のものが分類されている。

上層Ⅱ類は、口縁部に平行沈線をめぐらし、磨消縄文を施しており、西平式に相当する。上層Ⅲ類は黒褐色磨研土器および貝殻条痕の施された粗製土器からなり、晩期前半に比定される。上層Ⅳ類は突帯文土器の時期である。

石器は、石鏃25点、石錐1点、二次調整をもつ剥片7点、石斧7点、磨石、石錘などが、土製品は、土錘、耳飾（耳栓）が出土している（潮見1968a）。

第3・4次調査

第3・4次調査は遺跡の範囲確認を目的として、第1次・第2次調査区の東西に調査区が設定され、縄文時代前期から晩期までの遺物包含層が確認された（中越2000）。

東地区では、曽畑式にともなう焼石を含む礫群が5基検出されている。約6m四方の範囲で密集しており、それぞれ径0.8m～1.5mの不整円形を呈している。各礫群は30～70個、多いものは100個以上の、径3～4および5～10cm程度の礫で構成されている。礫の中には500℃以上の熱を受けたものも含まれており、意図的に集められたと考えられることから、生活面の可能性が高いとされる（中越1985・2000）。礫群が集中する位置を考慮すると、第1・2次調査地点と同様に、小丘の頂点付近が居住または生活の中心となっていたと考えられる。

西地区北西部のE6・7区において、柱穴および木炭集中地点が検出されている（中越2000）。E7区では、縄文時代後期とされる柱穴6基（径15～25cm、深さ10～40cm）、木炭集中部（長径50cm×短径20cm）、土坑1基（長径35cm×短径20cm）が検出された。E6区では、同じく後期に属すると考えられる柱穴7基（径10～20cm、深さ10～30cm）、木炭集中部2ヶ所（長径75cm×短径50cmおよび径30cm）が検出された。この遺構面より20～30cmの深さで、後期の柱穴6基（径10～20cm、深さ10～20cm）が検出されている。さらに、前期の柱穴状遺構2基（直径15cm、深さ25～40cm）が、40cm下部の基盤層を掘り込むように形成されていた（前掲:141頁）。

東地区でみられたように、西地区においても、小丘状となるやや高まった地点が居住区として占地されていたと考えられる。第3・4次調査で出土した土器の全容は明らかではないが、土器のほか、石器類として石鏃68点、尖頭器状石器1点、石錐3点、石匙1点、削器13点、楔形石器2点、二次加工のある剥片22点、石錐104点、石斧11点、石皿1点、磨石（または敲石）16点が挙げられている（前掲:142頁）。これらと、第1・2次調査出土遺物との重複は不明であるが、石鏃68点のうち76.5％にあたる52点が姫島産黒曜石で製作されている。装身具類では、縄文時代前期の玦状耳飾4点、後期のサメ歯状石製品1点、土製垂飾1点が出土している。

3. 山口大学埋蔵資料館所蔵月崎遺跡出土資料

土器

山口大学埋蔵資料館が所蔵する月崎貝塚の資料は、発掘調査の際の出土資料と表採資料がある。本稿では、発掘調査出土資料と判断される資料を報告する。土器は小片ばかりであるが、時期の判別がある程度可能なものを図化した。未報告の土器を含めた注記をみると、「月崎」・「月崎1」・「月崎3」・「月崎5」・「月崎7」が確認され、上層式に分類される土器が多数を占めている。上層・下層が混在していることも考えられるが、主に包含層上層出土の土器であると判断される。

図72のTZ1・2は月崎下層Ⅲ類である。TZ1には鋭い施文具で深めのキザミを施し、下部に二枚貝条痕を施す。内面にも二枚貝条痕を施す。TZ2は内面にナデ、外面に二枚貝条痕を施す。3～6は月崎上層Ⅰaである。TZ3は口縁部に沈線を施し、口唇部外面に無節Lを施す。波状口縁となる可能性がある。TZ4は口縁部に幅広の水平沈線を施し、口唇部に巻貝条痕を施す。一部擬縄文のように巻貝圧痕が残る。内面は口唇直下にナデ、その下部に巻貝によると思われる条痕を施す。TZ5は胴部片で、沈線による区画内にRL縄文を施す。TZ6は口唇が肥厚する口縁部片である。口唇部上面に沈線をめぐらし、外面口唇直下の水平沈線との間にRL縄文を施す。縄文帯は下方へのびる。内面は丁寧なナデである。TZ7・8は月崎上層Ⅰc類に相当する。TZ7は波状口縁を呈し、低い隆帯上に巻貝の押圧を斜め方

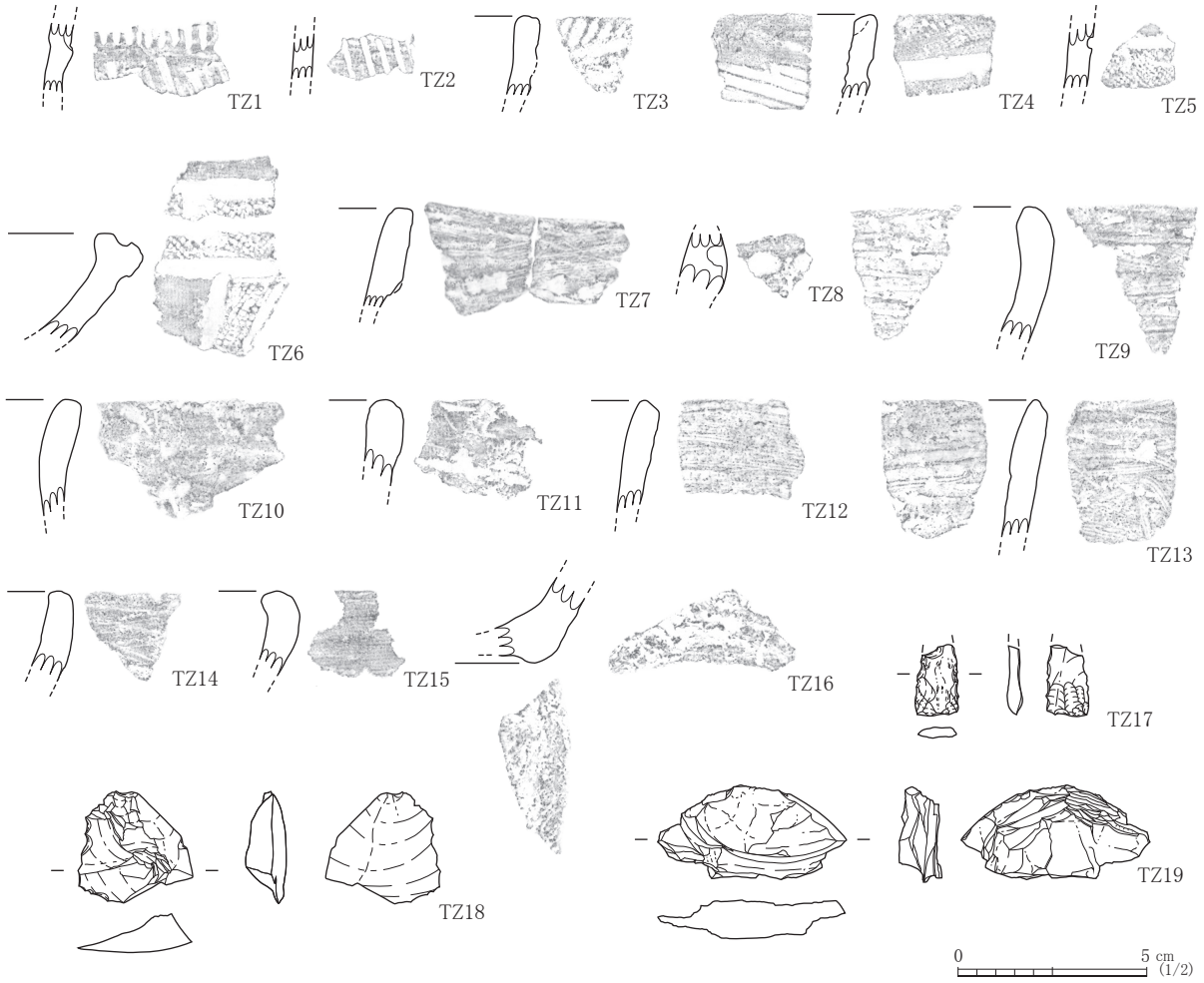

図 72 月崎遺跡出土遺物実測図（1）

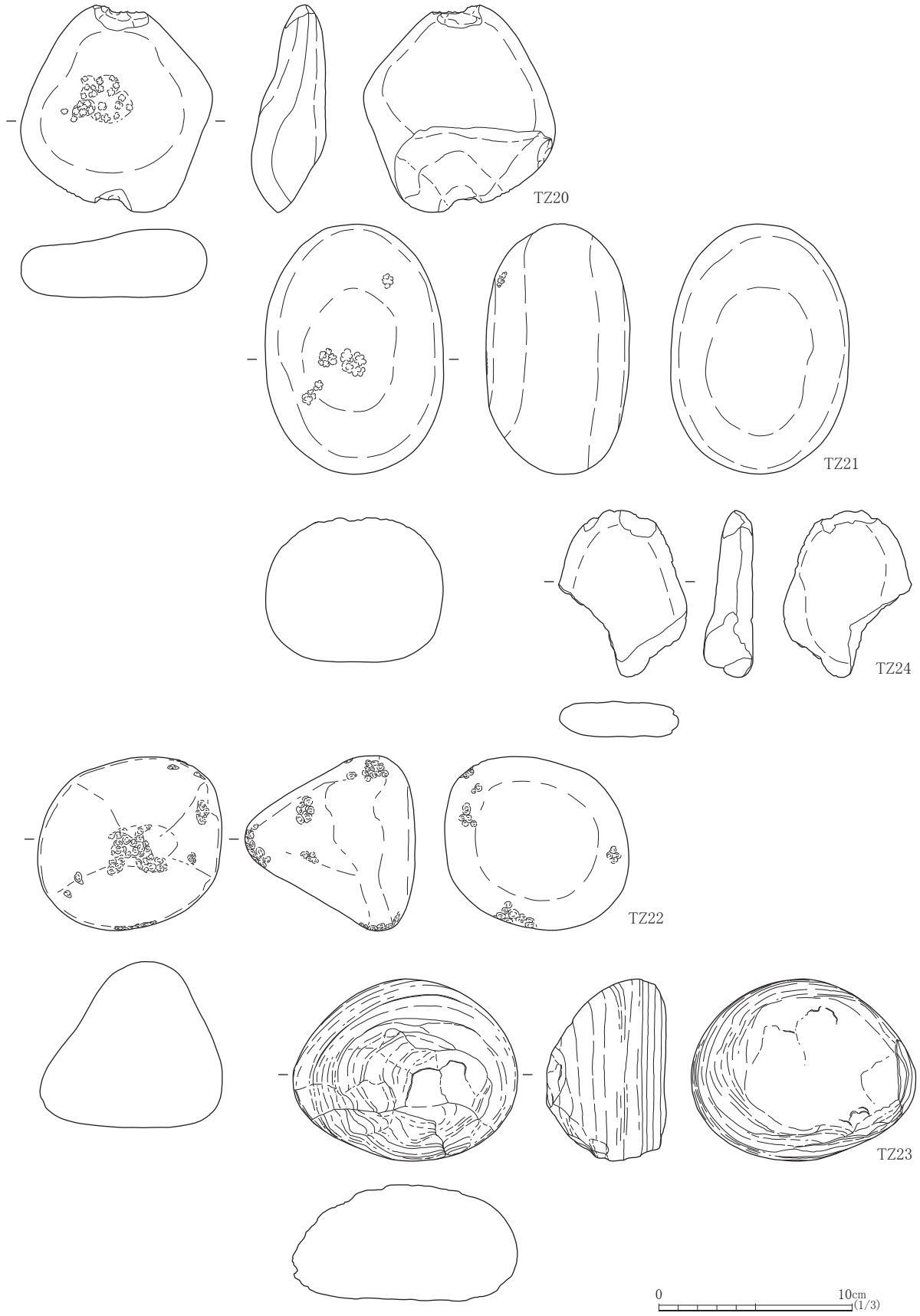

図 73　月崎遺跡出土遺物実測図（2）

写真 199　月崎遺跡出土遺物①

写真 200　月崎遺跡出土遺物②

TZ20a

TZ20b

TZ21a

TZ21b

TZ22a

TZ22b

写真 201　月崎遺跡出土遺物③

写真 202　月崎遺跡出土遺物④

向に連続して加える。内外面の調整は巻貝条痕である。TZ8は口縁部付近の破片であろう。巻貝先端により円形刺突を連続して施す。TZ9～14は月崎上層Ⅰe類である。いずれも巻貝による調整を主体とする破片である。TZ14・15は内面ナデ。16はやや上げ底となる底部である。上層Ⅰにともなうものであろう。内外面とも巻貝条痕を施す。

石器

石器は磨石類、石錘、剥片である。これらの資料には出土トレンチ名が記されたものがあり、いずれもA1～2拡張トレンチである。このうち、図73のTZ20には「下層」と注記がある。「4．9」は日付かと考えられるが、第1次調査は1961年4月3日～7日までおこわれたので（潮見1968:38頁）、誤記または「4．7」とみるべきかもしれない。

図72のTZ17は、月崎遺跡出土石鏃と比べ小型であるが、石鏃の未製品と考えられる。先端部を欠損する。姫島産黒曜石を使用し、正面には自然面が残る。TZ18は姫島産黒曜石の剥片である。TZ19は安山岩製の剥片である。TZ20は石錘である。打ち欠き部を欠損する。正面中央に敲打痕が残る。TZ21

表14 出土遺物（土器）観察表

法量（ ）は復元値

遺物番号	注記	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
TZ1	月崎7	縄文　深鉢	胴部		①褐色(7.5YR4/3) ②にぶい褐色(7.5YR5/4)	0.3～1mmの石英をやや多く含む	
TZ2	月崎3	縄文　深鉢	胴部		①②橙色(5YR6/6)	0.5～2mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ3	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.5～3.5mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ4	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.5～4mmの長石・石英を少量含む	
TZ5	月崎	縄文　深鉢	胴部		①灰黄色(2.5Y6/2) ②浅黄色(2.5Y7/4)	0.5～2mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ6	月崎	縄文　深鉢/鉢	口縁部		①②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.5～1.5mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ7	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①にぶい黄橙色(10YR6/4) ②にぶい赤褐色(5YR5/4)	0.5～3mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ8	月崎	縄文　深鉢	胴部		①②浅黄色(2.5Y7/4)	0.5～3mmの長石・石英を少量含む	
TZ9	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①にぶい黄橙色(10YR6/4) ②黄褐色(2.5Y5/3)	1～2mmの長石・石英を多く含む	
TZ10	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.3～2.5mmの長石をやや多く含む	
TZ11	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①②にぶい褐色(7.5YR5/4)	0.5～4mmの長石・石英を多く含む	
TZ12	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①②にぶい黄色(2.5Y6/4)	0.5～2mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ13	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①②灰オリーブ色(2.5Y5/2)	0.5～1mmの長石・石英を少量含む	
TZ14	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.5～1mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ15	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②灰黄色(2.5Y6/2)	0.5～2.5mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ16	月崎	縄文　深鉢	底部		①にぶい黄色(2.5Y6/4) ②黄褐色(2.5Y5/3)	1～3mmの長石・石英を多く含む	

表15 出土遺物（石器）観察表

法量（ ）は残存値

遺物番号	注記	器種	法量(mm) ①長さ②幅③厚さ④重量(g)	石材	備考
TZ17	月崎	石鏃未製品か	①(18.7)　②11.3　③3.4　④0.77	黒曜石	姫島産
TZ18		剥片	①29.3　②29.9　③9.9　④6.28	黒曜石	姫島産
TZ19		剥片	①26.0　②49.9　③11.2　④11.86	安山岩	
TZ20	4.9 月崎 A1～2拡張 下層	石錘	①(110.1)　②99.5　③(38.5)　④418.85	砂岩	
TZ21	月サキ A1～2拡張(2')	磨石	①129.4　②91.5　③74.3　④1343.6	花崗岩か	
TZ22	A1～2拡 月サキ	磨石/敲石	①89.5　②93.5　③86.6　④818.1	安山岩か	
TZ23	A1～2拡張 月サキ	磨石か	①94.7　②115.6　③62.1　④923.8	結晶片岩	
TZ24	月サキ	用途不明石製品	①(86.2)　②65.5　③24.5　④106.33	砂岩か	

は磨石である。正面に敲打痕がみられるが、各面ともよく研磨されており、磨石として用いられたと判断される。TZ22は磨石または敲石である。背面中央部は研磨され、敲打痕はみられない。正面の頂部をはじめとして各所に敲打痕が残る。TZ23は形状が磨石に類似しているが、結晶片岩製で風化が激しく、研磨面や敲打痕は確認できない。背面は剥離したものと考えられる。TZ24は用途不明石製品である。砂岩と思われる柔らかい石材を用いており、石材の硬度から石斧のような道具ではないと考えられる。石錘の可能性はあるが、下半部のほか上端を欠損しており断定は難しい。

土器・石器のうち、石器については、注記より第1次調査で出土した資料が含まれているとわかった。土器の注記には数字が含まれているものの、「月崎」のみの注記をもつ資料が大部分であり、アルファベットは全く記されていない。調査時のトレンチ名をみると、A区は11まで、C区は7までの番号がふられているため、土器の注記からA区またはC区のトレンチ名を特定することはできない。ただ、当資料館に収蔵されている土器小片ばかりがおさめられた遺物袋には、「4/5 A6 月崎上層部 □器小□（土器小片か）」と書かれた新聞紙が入っていた。報告した土器が、A6区の資料や石器と同時に収蔵されたとすれば、第1次調査の際のA区から出土した資料であると考えることができる。

4．周辺遺跡との比較からみた月崎遺跡

月崎遺跡の遺物・遺構の分布についてみてみると、まず第1次・第2次調査区の中央付近にて遺物包含層下層・上層ともに遺物の集中が認められている（潮見1968:42頁）。

まず下層式については、第1次・第2次調査において、下層はA1・A2・A6・A7・D1～3区から遺物が集中的に出土し、その他のトレンチからの出土は微量であったとされる。第3次・第4次調査では東地区から曽畑式期の礫群が検出されている（中越2000）。両遺物集中地点間の距離は約50mをはかるが、その間には現状ではやや浅い谷状となっていることから、両地点間に広く遺物が分布するかどうかについては明らかではない。第1次・第2次調査地点では基盤層となる赤褐色粘土層が比較的平坦に堆積しているため（潮見1968a:42頁）、居住活動の中心地点となったのであろう。E6区では前期とされる柱穴が2基確認されており、前期の居住範囲は遺跡西側まで点在していたようである。

後期以降の遺物包含層上層は、A8・A9区を中心に南北に広がっており、汀線側のA5・A6区では確認されていない（前掲:42-43頁）。上層Ⅰ類の出土量については表にまとめられており（前掲第1表）、A1～4区、A6・7区、B6区、C3区、D3～6区からの出土量が多い。B1～3区およびA8区以北ではほとんど上層Ⅰが出土しておらず、上層Ⅰ類の出土範囲が明確になっている。焼石・木炭の集中部は、A1区西半・A1’区（A1・2区間）・A4区中央・D6区であり、A1’区・D6区では土器・石器もまとまって出土している（前掲:44頁）。西区のE6・7区でも、後期の柱穴・土坑・木炭集中部が検出されており（中越2000）、遺物包含層下層と同様に西地区北側にかけて居住域が推定される。ただ、上述のように、上層Ⅰの時期に関しては中央部と西地区の間に一部遺物分布のない地点が存在する。

以上のように、砂堆上の遺跡であるため、時期によって占地条件は異なっているものの、基本的には基盤層が平坦な場所に遺物・遺構が密に分布しているようである。本稿で報告した資料は、調査区の中でも遺跡の中心部と考えられる部分から出土したものであるといえる。月崎遺跡で長期にわたって居住が繰り返されたのは、少なくとも前期および後期に関しては、汀線に近いというだけでなく居住に適した地形を維持していたからであると考えられる。

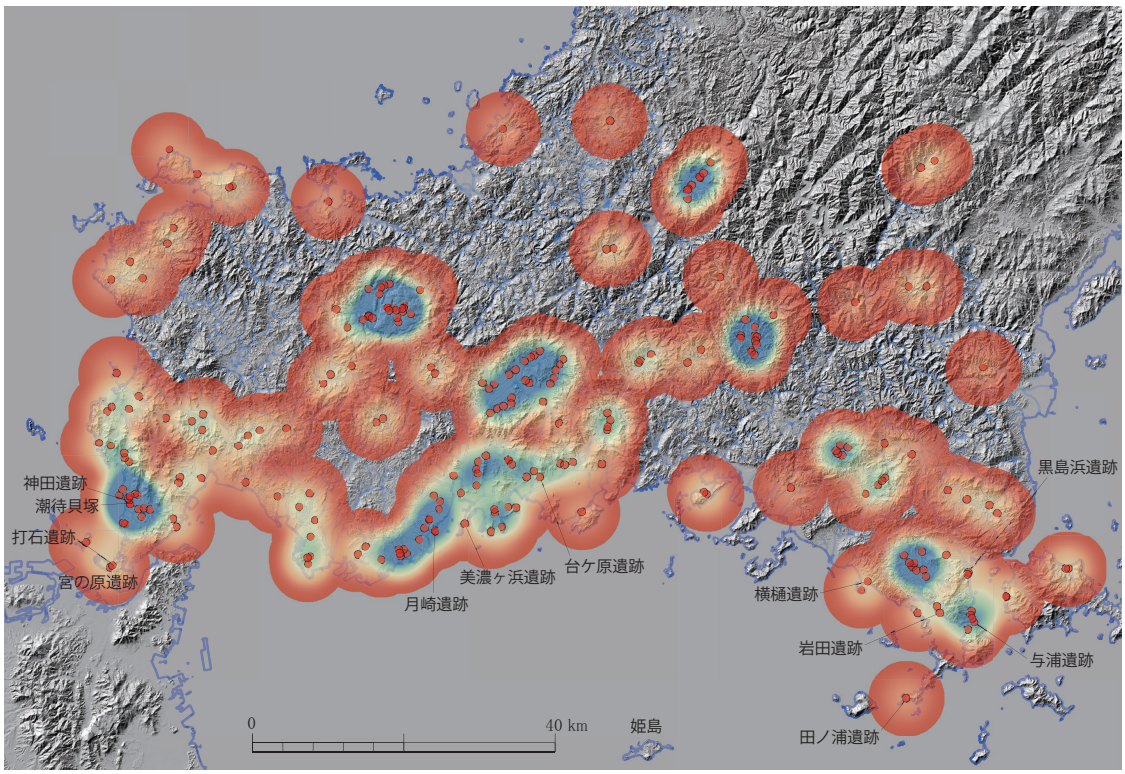

図 74　山口県縄文時代遺跡分布図

（国土地理院発行基盤地図情報数値標高モデル、国土交通省国土政策局国土数値情報（海岸線・河川データ）、山口県文化財地図情報システムより作成）

山口県域の臨海性集落としては、瀬戸内海沿岸・響灘沿岸においていくつかの重要な遺跡が知られている。月崎遺跡はその中のひとつであり、調査の概要報告はなされているものの、遺跡全容は明らかとなっていない。以下、今回報告した遺物をふまえ、周辺遺跡との比較を通じて、月崎遺跡のもつ意義について検討をおこないたい。

『山口県文化財地図情報システム（2008年）』からは、244の縄文時代遺跡[註3]を抽出することができた（図74）。時期ごとに分類できていないが、山口県における縄文時代遺跡の分布によると、いくつか核となる遺跡分布の集中地域が存在している。図中では、青で示された部分が遺跡分布の密な地域となる。調査や開発の規模・頻度に影響を受けているであろうが、現在のところ、関門地域、秋吉台周辺、宇部台地から佐波川河口にかけての沿岸部、山口盆地、徳佐盆地、鹿野盆地、八代盆地、島田川中流域、熊毛半島の9地域に遺跡の集中が認められる。このうち、沿岸部での集中が認められるのは、関門地域、宇部台地から佐波川河口にかけての沿岸部、熊毛半島の3地域となり、月崎遺跡はこうした地域内において中心部に位置している。潮待貝塚・神田遺跡で検討したように（川島2015・2016）、海岸部の遺跡では前期および後期前半を中心とした遺物包含層が形成されることが多く、月崎遺跡も同様の傾向を示している。山口県東南部においては、黒島浜遺跡・与浦遺跡・横樋遺跡など縄文時代後期を中心とする傾向が強いが、岩田遺跡・田ノ浦遺跡のように晩期に至るまで利用された遺跡が海岸部に点在する。

山口県域においては中期を主体とする遺跡が少ないが、宮の原遺跡では縄文時代中期の遺物がまとまって出土している（小野1961b、濱﨑2003）。当遺跡では、前期を主体とするA地点と、中期を主体とするB・C地点および第2次調査地点が60～70mほど離れている。時期ごとに居住地点が異なることを考慮すると、海岸部の遺跡において前期と中期では居住地の選択が異なっていた可能性があり、調査面積

の少ない遺跡では中期の居住地点が存在していることも考えられる。やや離れるものの、宮の原遺跡B地点から北東に約320mに位置する打石遺跡では、後期初頭～晩期の土器が出土しており（東2007）、近接する遺跡を含めて居住地点の問題に取り組む必要があると考えられる。

類型化は難しいが、臨海性の遺跡では、縄文時代前期から晩期にかけて数十mから数百m位置を違えつつも、繰り返し居住がおこなわれていた可能性を考慮しなければならないだろう。現状では、明確な生活面が確認できるのは、以前より指摘されてきたように前期と後期が中心となる。その背景には、従来より指摘されてきた砂堆という遺跡の立地条件のほか、海水面の変動が影響していたと推定される。特に山口県の東南部では、後期の遺物が偏在する傾向にあるとともに、海水面以下に遺物包含層が存在することが知られている。中期を主体とする遺跡が少ないことは、こうした理由に求められるのかもしれない。ただ、宮の原遺跡が良好な状況で残されており、山口県中央部の各遺跡で中期の土器がわずかであるが出土しているため、中期においても前期・後期の居住地点と比較的近い場所で居住活動がおこなわれたと予測される。

居住地点がある程度固定的であるとすれば、山口県域における縄文時代社会が小規模・遊動的であるとしても（山田2002）、このような遺跡を起点として交換などの交流がおこなわれたようである。石材の流通に着目すると、田ノ浦遺跡から姫島産黒曜石・サヌカイトの原石が大量に出土している（石井ほか2007）。月崎遺跡では原石の大量保有は確認されていないが、石鏃に使用された石材のうち、姫島産黒曜石は76.5％を占める（小南2016、中越2000）。これは、田ノ浦遺跡・岩田遺跡でそれぞれ石鏃の約1/3に姫島産黒曜石が用いられている状況と比較すると（小南2016）、月崎遺跡は姫島産黒曜石の比率が高くなっている。月崎遺跡の北東約15kmに所在する台ケ原遺跡でも、62点のうち姫島産黒曜石が大部分を占めるとされる（森田2000）。月崎遺跡では、石鏃より大型の剥片に安山岩が用いられる傾向は認められている（潮見1968:63頁）。田ノ浦遺跡・岩田遺跡と比べ、安山岩の産地から離れていることで姫島産黒曜石への依存度が高くなっていると考えられ、月崎遺跡からの活動範囲を示していると推定される。

5．まとめ

月崎遺跡では、前期から晩期までの土器が出土しているが、前期と後期を中心に居住痕跡が残されている。調査範囲中央部では、両時期の遺物が濃密に分布し、さらに東西の調査区にも遺構が分布している。本稿で報告した資料は、第1次調査における遺跡中央部の遺物包含層上層から出土した可能性が高いと考えられる。当資料館収蔵資料は月崎遺跡出土資料のごく一部であり、情報量は少ないが、出土資料が分散保管されている現状を考えると、月崎遺跡の再評価につながる契機となれば幸いである。層位的な発掘がおこなわれ、遺構も検出されていることから、月崎遺跡は山口県中央部における縄文研究に重要な情報を提供するものと考えられる。

月崎遺跡出土資料実見にあたっては、宇部市学びの森くすのきの石川健氏に大変お世話になりました。小南裕一氏からは有益なご教示をいただきました。末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

【註】

1）月崎遺跡出土資料は、当資料館のほか、広島大学考古学研究室、山口県立山口博物館、宇部市立学びの森くすのきなどに収蔵されている（中越2000）。

2）図71には、潮見（1968a）・中越（2000）掲載の図にしたがってトレンチ名を記載してあるが、第1次・第2次調査報告の記載（潮見

1968a:40-41頁）によるとトレンチ名が異なる可能性があり、一部修正を加えてある。本文中のみに記載のあるトレンチ名もある。

3）時代区分が縄文時代となっている遺跡のほか、時代区分が縄文時代となっていないが縄文土器が出土した遺跡の合計（2017年3月末現在）。これらの遺跡分布図をもとに、検索半径を5kmに設定し遺跡の分布密度を求めた。

【引用文献】

石井龍彦・安村隆博・児玉　勉　2007　『田ノ浦遺跡』山口県埋蔵文化財センター

小野忠熙　1961a　「美濃ヶ浜遺跡」『山口県文化財概要』第4集　山口県教育委員会　25-30頁

小野忠熙　1961b　「宮ノ原遺跡」『山口県文化財概要』第4集　山口県教育委員会　42-46頁

小野忠熙　1968　「第11章第6節2 東岐波前田発見の握斧」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会　193-194頁

川島尚宗　2015　「山口県の貝塚について」『第26回中四国縄文研究会高知大会　中四国の縄文貝塚　発表・集成資料』中四国縄文研究会高知大会事務局　21-26頁

川島尚宗　2016　「第Ⅱ章 潮待貝塚出土資料調査報告」『見島ジーコンボ古墳群 第124号墳 潮待貝塚 出土資料調査報告』山口大学埋蔵文化財資料館　29-47頁

河村吉行　2000　「前田遺跡」『山口県史 資料編 考古1』山口県　149頁

幸泉満夫　2005　「県立博物館収蔵の美濃ヶ浜遺跡資料Ⅰ」『山口県立山口博物館研究報告』第31号　71-81頁

小南裕一　2016　「西部瀬戸内における姫島産黒曜石の流通―主に後・晩期を中心として―」『山口考古』第36号　7-16頁

澤下孝信　2000　「美濃ヶ浜遺跡」『山口県史 資料編 考古1』山口県　135-136頁

潮見　浩　1968a　「第3章 月崎遺跡」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会　37-70頁

潮見　浩　1968b　「第11章第6節1 東岐波月崎岬発見の縄文式土器と石錘」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会　192-193頁

中越利夫　1985　「山口県月崎遺跡」『探訪 縄文の遺跡 西日本編』有斐閣　275-281頁

中越利夫　2000　「月崎遺跡」『山口県史 資料編 考古1』山口県　140-148頁

濱﨑真二　2003　『宮の原遺跡 山口県下関市彦島迫町五丁目地内 宮の原遺跡発掘調査（第2次）調査報告書』下関市教育委員会

東　哲志　2007　『打石遺跡 山口県下関市彦島迫町六丁目地内 打石遺跡発掘調査報告書』下関市教育委員会

冨士埜勇　1996　『岡山遺跡発掘調査概報』阿知須町教育委員会

冨士埜勇　1999　『砂郷遺跡発掘調査報告』阿知須町教育委員会

三浦　肇　1968　「第11章第2節 花園遺跡」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会　184-185頁

森田孝一　2000　「台ヶ原遺跡」『山口県史 資料編 考古1』山口県　125頁

山田康弘　2002　「中国地方の縄文時代集落」『島根県考古学会誌』第19集　1-32頁